

# 花のき村と盗人たち

新美

南吉

むかし、花のき村に、五人組の盗人がやってきました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、うい  
ういしい緑色の芽をのぼしている初夏のひるで、松林  
では松蟬が、ジイジイジイと鳴いていました。

盗人たちは、北から川にそってやってきました。花  
のき村の入口のあたりは、すかんぽやうまごやし  
の生えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。  
これだけをみても、この村が平和な村であることが、盗

人たちにはわかりました。そして、こんな村には、お  
金やいい着物を持った家があるにちがいないと、もう  
喜んだのでありました。

川は藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車  
をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くは行っていき  
ました。

藪のところまでくると、盗人のうちのかしらが、い  
いました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、  
おまえらは、村のなかへは行って行って様子を見てこ  
い。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、  
へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそう  
な家を見たら、その家のどの窓がやぶれそうか、そ  
この家に犬がいるかどうか、よつくしらべるのだぞ。  
いいか釜右工門。」

「へえ。」

と釜右工門が答えました。これは昨日まで旅あるきの  
釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで錠前屋で、家々の倉や長持などの錠をつくっていたのでありません。

「いいか角兵工。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵工が答えました。これは越後からきた角兵工獅子で、昨日までは、家々の鬨の外で、さか立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の銭をもらっていたのであります。

「いいか鉋太郎。」

「へえ。」

と鉋太郎が答えました。これは、江戸からきた大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりをみてまわり、大工の修業していたのであります。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっています。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右工門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵工は獅子まい

のように笛をヒヤラヒヤラ鳴らし、鉋太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいつてしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスッパ、スッパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をしてきたほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになったしまった。だが、親方になってみると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがしてくるから、こうしてねころんで待つておればいいわけである。」  
とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいつてみたりしていました。

やがて弟子の釜右工門がもどってきました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそツ、びっくりした。おかしらなどとよぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことにあいすみません。」  
とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましたね、その飯炊釜は、まず三斗ぐらいはたける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺につってあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あっしの眼にくるいはありません。嘘だと思ふなら、あっしがつくってみせましょう。」

「ばかばかしいことにいばるのはやめろ。」  
とかしらは弟子をしっかりとつけました。

「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊釜やつり鐘などばかりみてくるやつがあるか。それになんだ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」

「へえ、これは、その、ある家の前を通りますと、槇の木の生垣にこれがかけて干してありました。みるとこの、尻に穴があいていたのです。それをみたら、じぶんが盗人であることをついわすれてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにいってしまったのです。」

「なんというまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしっかり肚にいれておらんから、そんなことだ。」

と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかりとみなおしてこい。」

と命じました。釜右工門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいっていききました。

こんどは海老之丞がもどってきました。

「かしら、この村はこりやだめですね。」

と海老之丞は力なくいいました。

「どうして。」

「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。子どもでもねじきれそうな錠が、ついておるだけです。

あれじゃ、こっちのしょうばいになりません。」

「こっちのしょうばいというのはなんだ。」

「へえ、……錠前……屋。」

「きさまもまだ根性がかわっておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

「へえ、あいすみません。」

「そういう村こそ、こっちのしょうばいになるじやないかツ。倉があって、子どもでもねじきれそうな錠しかついておらんというほど、こっちのしょうばいに都合のよいことがあるか。まぬけめが。もういっぺん、みなおしてこい。」

「なるほどね。こういう村こそしょうばいになるのですね。」

と海老之丞は、感心しながら、また村にはいっていきましました。

つぎにかえってきたのは、少年の角兵工でありまし

た。角兵工は、笛をふきながらきたので、まだ藪の向

こうで姿のみえないうちから、わかりました。

「いつまで、ヒヤラヒヤラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」

とかしらはわかりました。角兵工はふくのをやめまし

た。

「それで、きさまは何をみてきたのか。」

「川についてどんどんいきましたら、花菖蒲を庭いち

めんにかかせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまっし

ろなじいさんがいました。」

「うん、そのじいさんが、小判の入った壺でも縁の下

にかくしていそうな様子だったか。」

「そのおじいさんが竹笛をふいておりました。ちよっ

とした、つまらない竹笛だが、とてもええ音がしてお

りました。あんな、ふしぎに美しい音ははじめてききました。おれがききとれていたら、じいさんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とんぼがえりを七へん、つづけざまにやってみせました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、笛竹の生えている竹藪を教えてくださいました。その竹で作った笛だそうです。それで、おじいさんの教えてくれた竹藪へいってみました。ほんとうにええ笛竹が、何百すじも、すいすいと生えておりました。」

「むかし、竹の中から、金の光がさしたという話があるが、どうだ、小判でも落ちていたか。」

「それから、また川をどんどんくたっていくと小さい尼寺がありました。そこで花の撓がありました。お庭にいっぱい人がいて、おれの笛くらの大きさのお釈迦さまに、あま茶の湯をかけておりました。おれもいっぱいかけて、それからいっぱい飲ましてもらって

きました。茶わんがあるならかしらにも持ってきまされたのに。」

「やれやれ、何という罪のねえ盗人だ。そういう人ごみの中では、人のふところや袂に気をつけるものだ。とんまめが、もういっぺんきさまもやりなおしてこい。その笛はここへおいていけ。」

角兵衛はしかられて、笛を草の中へおき、また村にはいっていきました。

おしまいに戻ってきたのは鮑太郎でした。

「きさまも、ろくなものはみてこなかったろう。」  
と、きかないさきから、かしらがいいました。

「いや、金持がありました、金持が。」  
と鮑太郎は声はずませていいました。金持ときいて、かしらはにこにこことしました。

「おお、金持か。」

「金持です、金持です。すばらしいりっぱな家でした。」

「うむ。」

「その座敷の天井ときたら、さつま杉の一枚板なんで、こんなのをみたら、うちの親父はどんなに喜ぶかも知れない、と思つて、あつしはみとれていました。」

「へっ、おもしろくもねえ。それで、その天井をはずしてでもくる気がいい。」

鮑太郎は、じぶんが盗人の弟子であったことを思い出しました。盗人の弟子としては、あまり気がきかなかつたことがわかり、鮑太郎はバツのわるい顔をしてうつむいてしまいました。

そこで鮑太郎も、もういちどやりなおしに村にはいっていきました。

「やれやれだ。」

と、ひとりになったかしらは、草の中へあおむけにひっくりかえっていいました。

「盗人のかしらというのもあんがい楽しようばいではないて。」

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やっちまえッ。」

という、おおぜいの子どもの声がしました。子どもの声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびっくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんととびあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へ逃げようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらまそうか、と、とつさのあいだに考えたのであります。

しかし子どもたちは、縄切や、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走っていきました。子どもたちは盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子どもたちの遊びごとか。」

とかしらははりあいがぬけていいました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊びだ。いまどきの子どもはろくなことをしなくなった。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいいながら、また草の中にねころがるうとしたのでありました。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえってみると、七歳くらいの子、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百姓の子どもとは思われません。旦那衆の坊ちゃんが、下男について野あそびにきて、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかもしれない。だがおかしなのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子どもはそういつて、ついとそばにきて、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子どもは、あちらの子どもたちのあとを追って走って行ってしまいました。

した。あの子どもたちの仲間になるために、この草鞋をはいた子どもはあとをみずについてしまいました。ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くつくつと笑いながら牛の仔をみました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをびよびよんはねまわって、持っているのがやっかいなものです。が、この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのです。

「くつくつくつ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちがばかづらさげて、村の中をあるいているあいだに、わしはもう牛の仔をいっぴきぬすんだ、といつて。」

そしてまた、くつくつくつと笑いました。あんまり笑ったので、こんどは涙が出てきました。

「ああ、おかしい。あんまり笑ったんで涙が出てきやがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるでないのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらはなっていたのであります。——かしらは嬉しかったのです。じぶんはいままで、人から冷たい眼でばかりみられてきました。じぶんが通ると、人びとはそら変なやつがきたといわんばかりに、窓をしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゆうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのであります。池の面に浮かんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がばツと体をひるがえしてしずんでいくのであります。あるときさるまわしの背中に負われているさるに、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにす

ててしまいました。みんながじぶんをきらっていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子どもは、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをい人間であると思ってくれたのでした。またこの仔牛も、じぶんをちっともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子どもも仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめのことであります。人に信用されるというのは、なんとといううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのであります。子どもころにはそういう心になったことがありました。あれから長いあいだ、わるいきたない心でずっといたのです。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちようど、あかまみれのきかない着物を、きゆうに晴着にきせかえられたように、奇妙なくあいでありました。

——かしらの眼から涙が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方になりました。松蟬は鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上にひろがっていきました。子どもたちは遠くへいき、「もういいかい」「まあだだよ」という声が、ほかのもの音とまじりあつて、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子どもが帰ってくるじぶんだと思つて待っていました。あの子どもがきたら、「おいしよ。」と、盗人と思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考えていました。

だが、子どもたちの声は、村の中へ消えていってしましました。草鞋の子どもは帰ってきませんでした。村の上にかかっていた月が、かがみ職人のみがいたばかりの鏡のように、ひかりはじめました。あちらの森でふくろうが、二声ずつくぎつて鳴きはじめました。

仔牛はお腹がすいてきたのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しようがねえよ。わしからは乳は出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中をなでていました。まだ眼から涙が出ていました。

そこへ四人の弟子がいつしよに帰ってきました。

### 三

「かしら、ただいまもどりました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村をさぐりにいつていたあいだに、もうひと仕事しちやつたのだね。」

釜右工門が仔牛をみていいました。かしらは涙にぬれた顔をみられまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思つていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といいました。

「おや、かしら、涙……じゃございませんか。」  
と海老之丞が声を落としてきました。

「この、涙てものは、出はじめると出るもんだな。」  
と、泣いて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んでくだせえ、こんどこそは、おれたち  
四人、すっかり盗人根性になってさぐってまいりまし  
た。釜右工門は金の茶釜のある家を五軒みとどけま  
すし、海老之丞は、五つの土蔵の錠をよくしらべて、曲  
がった釘一本であけられることをたしかめますし、大  
工のあつしは、この鋸でなんなく切れる家尻を五つみ  
てきましたし、角兵衛は角兵衛でまた、足駄ばきでと  
びこえられる堀を五つみてきました。かしら、おれた  
ちはほめていただきとうございます。」

と鮑太郎が意気こんでいいました。しかしかしらは、  
それに答えしないで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、い  
まだに、とりにこないのよわっているところだ。す  
まねえが、おまえら、手わけして、あずけていった子  
どもをさがしてくれねえか。」

「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」  
と釜右工門が、のみこめないような顔でいいました。

「そうだ。」  
「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」  
「かしら、もっとはっきり盗人根性になってくだせえ  
よ。」

と鮑太郎がいいました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまか  
く話してきかせました。わけをきいてみれば、みんな  
にはかしらの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子どもをさがしにい  
くことになりました。

「草鞋をはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主  
なんですな。」

とねんをおして、四人の弟子はちっていきました。か  
しらも、もうじつとしておれなくて、仔牛をひきなが  
ら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨とうつぎの白い花がほのかにみえている村の夜を、五人のおとなの盗人が、一匹の仔牛をひきながら、子どもをさがして歩いていくのであります。

かくれんぼのつづきで、まだあの子どもがどこかにかくれているかもしれないというので、盗人たちは、みみずの鳴いている辻堂の縁の下や柿の木の上や、物置の中や、いいにおいのするみかんの木のかげをさがしてみたのでした。人にきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子どもはみあたりませんでした。百姓たちはちようちに火を入れてきて、仔牛をてらしてみたのですが、こんな仔牛はこのあたりではみることがないというのでした。

「かしら、こりや夜っぴてさがしてもむだらしい、もうよみましょう。」  
と海老之丞がくたびれたように、道ばたの石に腰をおろしていいました。

「いや、どうしてもさがし出して、あの子どもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつのこつているてだては、村役人のところへうったえることだが、かしらもまさかあそこへはいきたくないでしょう。」  
と釜右工門が言いました。村役人というのは、いまだいえば駐在巡査のようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考えこみました。そしてしばらく仔牛の頭をなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへいこう。」

といいました。そしてもう歩きだしました。弟子たちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

たずねて村役人の家へいくと、あらわれたのは、鼻の先に落ちかかるように眼鏡をかけた老人でしたので、盗人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばしてにげてしまえばいいと思ったからであります。

かしらが、子どものことを話して、

「わしら、その子どもを見失って困っております。」  
といました。

老人は五人の顔をみまわして、

「いっこう、このあたりでみうけぬ人ばかりだが、どちらからまいった。」

とききました。

「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

「まさか盗人ではあるまいの。」

「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。」

釜師や大工や錠前屋などです。」

とかしらはあわてていいました。

「うむ、いや、変なことをいってすまなかつた。お前たちは盗人ではない。盗人が物をかえすわけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。いや、せっかくよい心で、そうしてとどけにきたのを、変なことを申してすまなかつた。いや、わしは役目から、人を疑うくせになつているのじゃ。人をみさえすれば、こいつ、かたりじ

やないか、すりじゃないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかっておくことにして、下男に物置の方へつれていかせました。

「旅で、みなさんおつかれじゃろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらったので、月をみながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいところへみなさんこられた。ひとつつきあいなされ。」

ひとのよい老人はそういって、五人の盗人を縁側につれていきました。

そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人とひとりの村役人はすっかり、くつろいで、十年もまえからの知りあいのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのでありました。

するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それをみた老人の役人は、

「おまえさんはなき上戸とみえる。わしは笑い上戸で、  
なっている人を見るとよけい笑えてくる。どうかわる  
く思わんでくだされや、笑うから。」  
と、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、涙というやつは、まことにとめどなく  
出るものだね。」

とかしらは、眼をしばたきながらいいました。

それから五人の盗人は、お礼をいって村役人の家を出  
ました。

門を出て、柿の木のそばまでくると、何か思い出し  
たように、かしらが立ちどまりました。

「かしら、何かわすれものでもしましたか。」  
と鉦太郎がききました。

「うむ、わすれもんがある。おまえらも、いっしょに  
もういっぺんこい。」

と、かしらは弟子をつれて、また役人の家には  
いっていききました。

「ご老人。」

とかしらは縁側に手をついていいました。

「なんだね、しんみりと。なき上戸のおくの手が出る  
かな。ははは。」

と老人は笑いました。

「わしらはじつは盗人です。わしがかしらでこれらは  
弟子です。」

それをきくと老人は眼をまるくしました。

「いや、びっくりなさるのはごもっともです。わしは  
こんなことを白状するつもりじゃありませんでした。

しかしご老人が心のよいお方で、わしらをまっとうな  
人間のよう信じていてくださるのを見ては、わしは  
もうご老人をあざむいていることができなくなりまし  
た。」

そう、いって盗人のかしらはいままでしてきたわしい  
ことをみな白状してしまいました。そしておしまいに、  
「だが、これらは、昨日わしの弟子になったばかりで、  
まだ何もわるいことはしておりません。お慈悲で、ど  
うぞ、これらだけはゆるしてやってください。」  
と、いいました。

つぎの朝、花のき村から、釜師と錠前屋と大工と角兵工獅子とが、それぞれべつの方へ出ていきました。

四人はうつむきがちに、歩いていきました。かれらはかしらのことを考えていました。よいかしらであったと思っておりました。よいかしらだから、最後にかしら「盗人にはもうけっしてなるな。」といったことばを、守らなければならぬと思っておりました。

角兵工は川のふちの草の中から笛をひろってヒヤラヒヤラと鳴らしていきました。

#### 四

こうして五人の盗人は、改心したのでしたが、そのもとになったあの子どもはいったいだれだったのでしよう。花のき村の人びとは、村を盗人の難からすくってくれた、その子どもをさがしてみたのですが、けっきよくわからなくて、ついには、こういうことにきまりました、——それは、土橋のたもとにむかしからあ

る小さい地藏さんだろう。草鞋をはいていたというのがしようである。なぜなら、どういうわけか、この地藏さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちょうどその日も新しい小さい草鞋が地藏さんの足もとにあげられてあったのである。——というのでした。

地藏さんが草鞋をはいて歩いたというのはふしぎなことですが、世の中にはこれくらいふしぎはあってもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなので、どうだって、いいわけです。でもこれがもしほんとうだったとすれば、花のき村の人びとがみな心のよい人びとだったので、地藏さんが盗人からすくってくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人びとが住まねばならぬということにもなるのであります。

「花のき村と盗人たち」

※底本 新装版 新美南吉童話集 3  
『花のき村と盗人たち』（2012年・大  
日本図書）

※このテキストを個人的に読む以外  
の利用をされる場合には、新美南吉記  
念館までご連絡ください。(TEL: 0569-  
26-4888)